

窓の外から響く子どもたちの声に安心する。私たちの未来を感じさせるからだ。しかし、わが国の少子化は歯止めがかからない。若者にとつて、もつと産み育てやすい社会が求められる。答えの一つは、「子育てを応援しよう」という地域の意識ではないだろうか。ヒトの子育ては本来「共同で行うもの」と言われているが、現代では「孤育て」の状況である。

# 想



ひだか りょうこ  
日高 陵好

## 「共同子育て」のすすめ

性別役割分業が根強いわが国の女性に「孤育て」の負担は重い。新型コロナウイルス禍では事態は深刻だ。待望の妊娠でも感染の不安は大きい。夫の立ち会い出産を含めて病院内での面会に制限があり、1人で乗り越えている。ママ友と出会う機会も少なく、助け合いが難しい。新型コロナウイルス感染拡大は私たちに、人とのつながりの大切さを再認識させた。子育てへの私た

ちの意識も見直したい。それは「共同子育て」の再現である。

私たちも子育てを共に担うのである。難しく考える必要はない。電車内で立っている妊婦さんに席を譲るとか、ベビーカーを押すご夫婦が笑顔になるような声掛けを積極的に行う。日常の何げない気遣いや関心が子らを歓迎する雰囲気を生み出し、子育て家庭を支える力になる。シルバーボランティアとして子

どもの見守りや送迎など、ちょっとしたお手伝いもできる。

全国の自治体に「子育て世代包括支援センター」が設置された。妊娠期から育児期までを切れ目なく支援する拠点である。ご夫婦やその家族からのどんな相談も無料で受け、妊娠・出産・子育てに関する情報提供や他機関の紹介をしてくれる。広島県はセンターを「ひろしま版ネウボラ」と位置づけて強

化している。「ネウボラ」とは、モデルであるフィンランドの保健センターの別名であり、「アドバイスの場」を意味する。「共同子育て」の意識は、子育て家庭の側にも必要だ。サポートを

ちゅうちよなく求めることが「孤育て」の脱却になる。「共同子育て」で産み育てやすい社会を実現し、子どもたちの声の響くまちが続くことを願う。  
(県立広島大学教授)